

板状粘土をレリーフに構成して！（２）

—— ガラスを溶かした「動植物のレリーフ」——



写真1「花のレリーフ」
〔約 1200℃焼成／ガラス／無釉〕（縦 25cm
×横 18cm）

表現内容の要素と発想の視点

- ・表現材料：楽焼用粘土、ガラス
- ・造形要素（色／形／材質）：半立体のレリーフ、ガラス色や材質
- ・表現技法：板づくり、タタラづくり、切り針の使い方、ひもづくり、ガラスによる彩色、ほか
- ・表現様式：具象形／半具象形
- ・表現対象／主題：動植物／表現者が動植物、ガラスの色や材質を生かしたレリーフを思考、追究、決定する

造形発想と表現について

一般的な瓶などに使われているガラスは1150℃前後で溶ける。瓶を砕いたガラス片やビー玉、おはじきなどを粘土作品と一緒に焼成するとガラスを生かした焼き物の表現ができる。

ここでは、動植物をモチーフ（表現対象）に装飾的なレリーフをつくることにする。

まず、粘土の板を動植物の形に切り取り、レリーフの台（グラウンド）をつくる。

次に、レリーフの台に縁や間仕切りをつくる。縁や間仕切りはレリーフの形や色を際立たせると同時に、上に置いたガラスが溶けて流れ出たり、色ガラスが混じり合ったりしないようにするためのものである。スタンドガラスの形や色を分ける間仕切りを考えると分かりやすい。縁や間仕切りは5mm程度の高さにする。

レリーフの台が完成したらモチーフの縁や間仕切りに合わせ、形や色の組み合わせを考えながらガラス片を置いていく。ガラス片は、茶、緑、青などの色瓶や透明な瓶を砕いたものを使った。1200℃で焼成するときれいに溶け、ガラスの色合いや材質を焼き物の表現に生かしたレリーフが楽しめる。

用具／材料

楽焼用粘土（約 1.5kg）、どべ、ガラス片（青色系、緑色系、茶色系、透明）、粘土板、タタラ板（厚さ 8mm）、粘土延べ棒、粘土べら、粘土切り針、敷布、なめし革、筆、カップ（どべ／ガラス片入れ）、軍手、ピンセット、雑巾、新聞紙、ほか

表現のプロセスと内容

●イメージした動植物の形に合わせ、粘土を板状に延ばす

- ・約 1 kg の粘土を手のひらで叩き、あらかじめイメージに合った動植物のおおよその形に延ばしていく。厚さは 1cm 程度まで延ばす。(写真 2)

《タタラ板と粘土延べ棒は、はじめから粘土を延ばすのに使わない。》

●タタラ板(厚さ 8 mm) と粘土延べ棒で厚さと表面を均一に延ばす

- ・板状粘土はレリーフの台の部分で、ここでは 8 mm の厚さにした。(写真 3)

●動植物をイメージし、レリーフのデザインを考える

- ・写实的ではなく、動植物を模様として考えて装飾的、デザイン的に表現する。
 - ・ガラスが溶けたときの色や形の組み合わせもイメージする。
- 《スタンドクラスを参考に、その間仕切りが、色と形の構成の美しさであることを考

えてみるとよい。》

●デザインした動植物の形を板状粘土に粘土べらで下描きする

- ・粘土べらで軽く外形や間仕切りを線描きする。(写真 4)

《全体を見ながら、色や形の組み合わせを考え、間仕切りを追加したり、取り除いたりしながら構成していく。》

●動植物の外形を粘土切り針で切り取る

- ・粘土切り針は、粘土の板に対して垂直に立て、切る方向に斜めに倒して引くと切りやすい。(写真 5)

《構造に無理がない範囲で、グラウンドの中を切り抜くようなこともできるが、2cm 以上の縁を残すようにしたい。「写真 6」は、花と葉の付け根の部分のくり抜きである。》(写真 6)

- ・ささくれた粘土の切り口は、なめし皮で整えておく。

●縁や間仕切り用のひも状粘土をつくる



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7

- ・1cm程度の太さで、できるだけ均質なひも状粘土であると扱いやすい。(写真7)
《縁や間仕切りの高さにムラがあると、溶けたガラスが低いところから流れ出す恐れがある。》

●ひも状粘土を縁や間仕切りとして貼る

- ・接続、接着部にどべを十分につける。(写真8)
- ・ひも状粘土を指でしっかり押しつけながら、縁や間仕切りの幅や高さを均一に貼る。幅や高さは5mm程度を目安にする。(写真9・10・11)



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15



写真16

《粘土べらなどを使い、ひも状粘土とグラウンドの間隙をしっかりと埋めるようにする。》(写真12)

●レリーフを吊るす穴を開ける

- ・吊るし穴はレリーフ全体のバランスを考え、粘土べらで1か所、または2か所開ける。
《吊るし穴を補強するために粘土を付け加え、その上から穴を開けている。》(写真13)

●レリーフのグラウンドが完成したら乾燥させる

- ・ガラス片は完成直後でも、乾燥させてから

置いてもどちらでもよい。ここでは10日程乾燥させてからガラス片を置いた。(写真14・15)

◎焼き物に使えるガラス類について

一般的に瓶類やビー玉、おはじきなどの玩具類に使われているガラスは、種類によって多少異なるが1000℃前後から溶けはじめ、1200℃で完全に溶けると考えてよい。これらのガラスは焼成に合わせて溶かし、焼き物に使うことができる。焼成による色の変化はないので、瓶の色がそのまま発色する。

しかし、ビー玉やおはじきなどに使われている赤や黄色、あるいは表面処理されたすりガラス状のものや特殊な光沢などは後処理されたものであるため、再度溶かすと、そのような色や状態は損なわれることになる。焼き物に使えるガラスは、基本色としての茶色系、緑色系、青色系と透明色である。ガラスに含まれる酸化金属類などの違いにより多少色合いが異なってくる。

●瓶を砕いてガラス片をつくる

・一般的に多いのは透明、あるいは茶色系の瓶である。最近は緑系や青系など、さまざまな色瓶があるのできれいなものを集めておく。

・瓶はしっかりとした布袋などに入れ、口を縛って木槌やげんこのうなどで叩いて細かく砕く。布袋に入れて叩くと、ガラス片が飛び散らず安全である。

《瓶を砕くときだけではなく、ガラスの破片を扱うときは軍手、防護メガネなどを付けて行うなど、安全に十分注意する。》

《着古したジーンズの足の部分を切り取り、切り口をひもで縛ると丈夫な袋ができる。》

・ガラスは色ごとに、カップなどに分けておくと使いよい。(写真16)

●ガラス片をピンセットで置く

・色の組み合わせを考えてグラウンドにガラス片を置く。(写真17・18・19)

《異なる色を置いて自然の混色を行うこと



写真 17



写真 18



写真 19



写真 20



写真 21

もできる。》

- ・ガラスが溶けたとき、間仕切りから流れ出さないように溶けるガラスの量を考えて置くことが大切である。(写真 20)
《ガラスがグラウンドから流れ出すと、窯の棚板や作品を傷めることになるので十分

に注意する。》

●ガラス片を置き終わったら十分に乾燥させ、
1200℃で焼成する

- ・ガラス片を置いた作品 (写真 21)
- ・棚板にグラウンドを平らに置いて焼成する。

表現のバラエティ



写真 22 完成作品
「インド象のレリーフ」
〔約 1200℃焼成／ガラス／無釉〕(縦 16cm × 横 29cm)



写真 23 完成作品「ミミズクのレリーフ」
〔約 1200℃焼成／ガラス／無釉〕(縦 29cm × 横 15cm)



写真 24
完成作品
「鶏のレリーフ」
〔約 1200℃焼成
／ガラス／無
釉〕(縦 28cm
× 横 17cm)



写真 25 完成作品
「フグのレリーフ」
〔約 1200℃焼成／ガラ
ス／無釉〕(縦 16cm
× 横 25cm)



写真 26 完成作品
「花輪のレリーフ」
〔約 1200℃焼成／ガラス
／無釉〕(縦 18cm × 横
28cm)



写真 27 児童作品 (4年)
「エンゼルフィッシュ」
〔約 1200℃焼成／ガラス／
無釉〕(縦 16cm × 横 20cm)



写真 28 児童作品 (5年)
「私のうるる」〔約 1200℃
焼成／ガラス／無釉〕
(縦 27cm × 横 19cm)